



「たまり場」実践活動レポート

「たまり場・たろう」

人と人、人と地域をつなぐ「たまり場」



「茨城をたまり場でつなごう！」と活動する  
小松崎光正さん登美子さんご夫妻

下館駅前の稲荷通りに誕生したアルテリオ(しもだて美術館)の裏通りにある「たまり場・たろう」。

1階はプチ・フリーマーケットの「もったいないフロア」、2階はレトロな「ふれあいカフェ」。たまり場の開設は2004年5月、主宰する小松崎光正さん登美子

さんご夫婦(61歳)は地元、下館に生まれ育った同級生です。

開設して4年間は無料で開放し、「お年寄りが来てくれて世代間の交流をしながらお茶を飲んだり食事をすれば楽しいからそれでいい。」と思っていた登美子さんは、市の図書館でアルバイトをしながら運営費を捻出していました。60歳で辞めたことがきっかけで、「必要な経費をもらった方が気兼ねなく集まれる。」ことに気づき、フェアトレードのコーヒーや地元の食材を使った手づくりのケーキを出し、作品展示の手数料等で維持費を作り、資金繰りの目鼻が立ってコミュニティビジネスができつつあるといえます。

病との闘いを乗り越えてできた「たまり場」

ご主人の光正さんは44歳のときに脳内出血で倒れ左半身がまひしてリハビリ生活になり、さらに2007年6月からは週3回の人工透析も欠かせません。登美子さんは1992年肝臓がんが発覚、がんとの闘いながら実母の介護をしてきました。そんな体験から、介護者のリフレッシュ井戸端会議を行う「下館地域在宅介護を支える会」(会員約30名)が1997年に活動をスタートし、現在、「福祉のまちづくり」を願う異世代市民グループになっています。

他にも女性のがん経験者のつどい「レディス・ピア県西」(会員約20名)、40歳前後の子育て世代が家族ぐるみで参加するボランティアグループ「たろう案山子の会」(会員約30名)、もったいないが合言葉の手づくりグループ「もったいない倶楽部」等が誕生し、それらの団体が「たまり場・たろう」を拠点として、毎月定例会を行いながら地域の力を高める草の根運動を展開しています。

雛人形は匿名の寄付、本棚にも寄付によるたくさんの本



「たまり場たろう」の2階ふれあいカフェ



地元作家の陶芸品の展示

人情の街づくり「たまり場」から生まれるドラマやイベント

「地域の名人が集まっている」ということで簡単に棚を作る人や、家で介護をして息抜きに毎日買い物帰りに寄ってくれる人など「たまり場」にはたくさんの人が集まり「助けられたり、助けたり」の心温まるドラマもたくさん生まれています。今、定期的に行っている「ラストサンデーワンコインランチ」は毎月最後の日曜日12時から、家の自慢料理みたいなものを交代で作り料金は500円。また、毎月第2土曜の「飲みニュケーション」はご主人が担当。60歳代から30歳代の世代を超えた男達が熱く楽しく語り合うひとときです。

「たまり場」の仲間の発想で実現したイベント「ここがふるさと、あんたが大将」も行いました。ここ(古里)に住んでいる一人ひとりが主役なのよという思いをこめ、商店会や自治会をまきこみ、他のボランティアグループの協力もあり、200名の参加のもと賑やかで元気な商店街を楽しみました。仲睦まじいご夫妻は口をそろえて「たまり場は集まってくる仲間からの発想で広がっていきます。それが非常に楽しいしやめられません。」と明るく話してくれました。

茨城を「たまり場」でつなごう!

4月から昼のランチを格安で週3回提供する「月・水・金食堂」を企画。週に2回は休みにして県内に広げる活動をしていきたいと言います。県内各地に声をかけ、実際に見に来る60歳代の方も多くなっています。茨城を「たまり場」でつなごうと「たまり場ネット」を愛してくれる10人くらいで規約を作り始め、4月頃には立ち上げる予定です。「ここをベースに県内に広げていこう、形態は別々になると思うんですが、地域性があるのがいいことだと思う、生活者の目線で気楽にやりたい、責任感はきちんと持ってやっていきます。」とお二人。世代を超えて人と人が支え合うコミュニティ社会「たまり場」の芽が県内各地にできてくることでしょう。

たまり場・たろう

主宰：小松崎光正・登美子  
所在地：筑西市甲67  
アルテリオ(しもだて美術館)  
裏通り南へ徒歩2〜3分  
連絡先：筑西市小川1444-28  
TEL090-1797-3045  
E-mail:  
s.sasaerukai@dream.com



携帯電話で読み取るだけで簡単に「ふくしネットワークいばらき」にアクセスできます。